

## 概要書

安野 直

論文題目：〈性〉の境界を読み解く

——20世紀初頭のロシアにおける女性向け大衆小説とジェンダー

### 論文の主題

本論文は、20世紀初頭のロシアにおける文学作品のなかで、既存の「男／女」の秩序におさまらない非規範的な〈性〉の諸相がいかにも示され、またそうした表象を支える原理がいかなるものであったのかを、当時の社会・文化的コンテクストを参照しつつ、明らかにする。この時期には、ソロヴィヨフやローザノフらによってセクシュアリティの問題は形而上学的に議論され、「男／女」というジェンダーの境界そのものを根本から問い直すセンセーショナルな作品が、思想や文学の領域で相次いで発表された。

本論文では、20世紀初頭のロシアで都市のミドルクラスの女性たちに人気を博した、アナスタシヤ・ヴェルビツカヤ（1861-1928）、エヴドキヤ・ナグロツカヤ（1866-1930）、リディヤ・チャールスカヤ（1875-1937）によって著された大衆小説を考察の対象とし、これらの作品が、いかなる方法を用いて非規範的な〈性〉のあり方を呈示し、「男／女」や「異性愛／同性愛」といった境界に向き合ったのかを探っていく。20世紀初頭に流行した女性向け大衆小説は、当時ベストセラーとなったにもかかわらず、文学史のなかであまり顧みられてこなかった。しかし商業的成功にくわえ、これらの作品内には、類型化された男女のジェンダーやセクシュアリティをめぐる言説や表象で充溢しているがゆえに、20世紀初頭のロシアにおける「男／女」に収まらない〈性〉のありようがどのように表象されていたのかを問ううえで、女性たちの欲望をかきたてたこれらの大衆小説は、もっとも適していると考えられる。

女性向け大衆小説には、進歩的女性像を示す「新しい女性」にくわえ、現代で言うところの「LGBTQ」に相当する同性愛や性役割の反転した人物形象などの〈性〉の表象が、いっぽうで既存の規範から逸脱しつつ、他方で「男／女」や「異性愛／同性愛」の境界を強化するという矛盾をかかえながら、書誌雑誌や広告をとおして広く言論の場に流通した。さらにその際、女性作家たちは女性嫌悪的な思想や性科学といった支配的な言説

を用いて「男性的な女性」や「男性同性愛者」を造形しつつ、密かに規範から逸脱する密猟的戦術を採った。たしかに女性向け大衆小説は、ジェンダー（女性）とジャンル（大衆）という点において「弱者」ではあったが、「強者」の権力的秩序を奇貨として利用することによって、規範やヒエラルキーを転覆する力をもったのである。女性向け大衆小説の作中に描かれる男性並みの平等を志向する「新しい女性」や、性科学による人格としての同性愛者も、宣伝メディアにあらわれる性差を強調する「女らしさ」の記号を身にまとった「消費する女性」も、独自に編み出されたものではなく、またこれらの言説は時として女性や同性愛者にたいして抑圧的に働く場合さえある。しかし小説家たちは、これらの既成の規範や支配的言語を使用しつつも、その内部から規範を揺るがし、オルタナティブな性のあり方を提示した。すなわち、女性向け大衆小説に描かれる非典型的な〈性〉の表象は、現実の硬直的なジェンダー秩序を懐中から揺るがす、文学＝フィクションを通じた既存のジェンダー秩序への抵抗としてとらえ直せるだろう。

## 序章 20世紀初頭の女性向け大衆小説とジェンダー研究

序章では、当時多くの読者の支持を得ていた女性向け大衆小説が、「男／女」と「高級／大衆」という二重の権力関係のなかで「正統」な文学から疎外されつつも（あるいは、だからこそ）、非規範的〈性〉の諸相を明らかにするうえで、重要なテキストであることを示す。次いで、これまでの女性向け大衆小説に関する先行研究を概観し、それらにおいては、作中人物やその欲望の表出をジェンダーの視角から分析したもの、および、テキストに何らかの普遍性を見出し、ロシア文学の伝統に位置付けようとするもの、という異なる傾向がみられることを指摘する。

さらに第1章以降の読解の予備的作業として、20世紀初頭までのロシアにおけるジェンダーをめぐる状況を整理する。具体的には、18世紀以前には家父長制的であった男女の関係性が、近代化にともない男女の情緒的紐帯を介して形成された家庭を中心に再編されることになり、男性を公的領域に、女性を私的領域にそれぞれ振り分ける性別役割分業体制へとジェンダー秩序が移行していった。すなわち、女性向け大衆小説が書かれた20世紀初頭のロシアのジェンダーをめぐる社会状況は、西欧近代のものと同程度相似形を成していたのである。女性嫌悪と男性同性愛嫌悪を両輪とする近代のジェンダー構造（＝〔ヘテロ〕セクシズム体制）のなかでは、進歩的女性と男性同性愛は非規範的〈性〉として排除の対象となった。それゆえ、この当時のロシアにおける非規範的〈性〉

の表象を解き明かすうえで、「女性」というジェンダーと「男性同性愛」というセクシュアリティの主題の双方を同時に扱う必要があるのだ。

## 第1章 女性向け大衆小説のベストセラー化とフェミニズムのパラドクス

### ——女性解放と「女らしさ」のあいだで

第1章では、1917年の革命以前の女性向け大衆小説が、なぜベストセラーとなったのかを『ニーヴァ』や『ヴォリフ書店ニュース』といった雑誌メディアを中心に検討する。そのことを通して、フェミニズムの興隆による政治的主張の増加と大衆消費社会の到来によって、女性の男性と同等の権利を求める平等への要求と、メディアによって操作された「女らしさ」の追求という相矛盾する、20世紀初頭のロシアのジェンダーをめぐる状況を明らかにする。女性向け大衆小説のベストセラー化が生じたのは、読者の消費の欲望と女性解放の志向という娯楽性と社会性の双方に、雑誌メディアが応えたからであることが明らかとなるだろう。

大衆小説の販売促進において特徴であったのは、メディアが読者＝消費者の欲求に応じて女性向け大衆小説をフェミニズム的作品として評価するいっぽうで、「女らしさ」をまとった作家たちの肖像写真を掲載することによって「消費する女」というイメージを創出してみせた点である。家庭という私的領域から、娯楽としての買い物のために都市という公的空間へと流入する「消費する女」の形象は、近代のジェンダー分業体制を揺るがしかねない存在であった。女性作家たちはそうしたイメージを演じる際には、「女らしさ」の強調、言い換えるなら男性との性的差異をアピールした。ここには、フェミニズムの「平等」の戦略とは異なった、「差異」の強調という戦略を看取することができるだろう。それはまさに、女性解放運動の興隆と市場経済の発達という異質なふたつの現象の邂逅によって、もたらされたものなのである。

\*

続く第2章から第4章までは、おもに作中内の登場人物たちの「女性」というジェンダーに着目し、ナグロツカヤの『ディオニュソスの怒り』やヴェルビツカヤの『幸福の鍵』に描かれる「新しい女性」、チャールスカヤの少女小説にあらわれる「冒険する少女」といった、従来の性規範を逸脱する性別越境的要素を有した進歩的女性像を浮かび上がらせる。

## 第2章 ナグロツカヤ『ディオニュソスの怒り』における「新しい女性」

第2章では、ナグロツカヤの『ディオニュソスの怒り』(1910)を考察の対象とする。小説のなかで描かれる「新しい女性」がいかなる形で創造されたのか明らかにするために、スチヒーヤ(自然の威力)という概念を読解のための導きの糸としつつ、作品の人物造形とプロットに着目をする。これまでの批評や研究では、この小説は「男性的な女性」と「女性的な男性」のロマンスという男女のジェンダーが反転した物語として読まれてきた。ではナグロツカヤはなぜ、男女の性を反転して描かなければならなかったのだろうか。それは、主人公のターニャが、彼女の恋人であるスタルクが担う性や肉体と結びついた女性的気質から脱し、イリヤのようなマスキュリンで知的な男性へと移行するという、彼女の「新しい女性」となる過程を描くためであり、ジェンダーの反転はこうした女性性の克服の表現として、要請されたものであった。

こうした女性性の克服を核とした「新しい女性」像は、ヴァイニンガー、ニーチェの思想を受容・デフォルメしつつ、文化による自然の統御やフィジカルなものの抑圧といった女性嫌悪に支えられていた。すなわちそれは、「文化＝男性」、「自然＝女性」という女性の抑圧的構造を反復しており、そこには「新しい女性」を創出し、女性解放を志向することによって、かえって「男／女」の境界を強化してしまっているという逆説をはらんでいるのである。しかし同時に『ディオニュソスの怒り』は、物語最終盤で示される父・母・子という既存の家族関係が流動化しており、その点において性別二元論を崩す可能性もまた内包したテキストであることが明らかになる。

## 第3章 ヴェルビツカヤ『幸福の鍵』における「死」と「幸福」

第3章では、フェミニズムを中心的主題としたヴェルビツカヤの『幸福の鍵』(1909-13)をとりあげ、主人公マーニャの自殺という結末から、この作品における女性解放の思想を読み解く。『幸福の鍵』は一見すると典型的な異性愛のメロドラマを装っているが、その結末において、女性主人公は恋人と結ばれないことによって、ハッピー・エンディングが損なわれる。この異性愛のプロットとそのねじれというメロドラマの公式の逸脱こそが『幸福の鍵』の核心であり、主人公の死という結末は重要な意味をもつと考えられる。

本章では『幸福の鍵』における女性解放とは、マーニャの自殺という結末を「死」という選択を通して未来を否定し、異性愛主義に立脚した生殖規範への抵抗として解釈す

る。すなわち、登場人物たち、とりわけマーニャの「死」＝未来の欠如という結末は、「ロシアン・エンディング」の一種や、単純なニヒリズム、フェミニズムの挫折などではなく、女性を妊娠・出産といった生殖の主体として家庭に囲う「正しいセクシュアリティ」をめぐる性規範と、鋭く対立するものであったのだ。この読解を通じて、一見すると、マーニャと複数の男性たちとの異性愛のメロドラマである『幸福の鍵』がじつは、——ミソジニ的言説へと容易に転換する危うさを内包しながらも——異性愛の桎梏を露呈させ、秩序を転覆させる可能性をもちうるテキストであることを明らかにする。

#### 第4章 チャールスカヤの少女小説における「冒険する少女」たち

第4章では、チャールスカヤの少女小説『寄宿女学校生の日記』(1901)と『小公女ジャヴァーハ』(1903)、『シベリア娘』(1908)を考察の対象とし、冒険小説というジャンルの特性と「冒険する少女」という彼女の作品に登場する規範に囚われない少女像の関係性、および彼女の創作の革新性を明らかにする。

チャールスカヤの少女小説には、少女たちの冒険や男装、少女同士の親密性といった規範的な「女らしさ」からの逸脱が描かれている。たしかに、『幸福の鍵』や『ディオニュソスの怒り』といった異性愛を前提としたメロドラマ風の物語の場合、ジェンダーの越境や非異性愛的関係性を描くことはそれ自体として意外性を持ち得るかもしれない。しかしチャールスカヤの冒険譚的少女小説の場合、ジャンルの特性として非日常性を特徴としているため、前二章で論じてきた作品とはその表象があらわれる原理が異なっていると考えられる。すなわち、チャールスカヤの作品のなかに描かれる「冒険する少女」や少女たちの親密な関係性は非日常空間を演出するための道具立てであり、『幸福の鍵』や『ディオニュソスの怒り』のように主人公の発達やアイデンティティを規定するものとは異なった、一時的なパフォーマンスとしての意味合いが強いのである。だが注目すべきは、非規範的な〈性〉の表象を支える原理がヴェルビツカヤやナグロツカヤの大衆小説とチャールスカヤの少女小説とでは異なっているものの、双方が女性解放運動の興隆という同一の社会・文化的現象の下に発展したようにみえてしまう点である。チャールスカヤの描く「冒険する少女」の形象は、当時の時代背景やヴェルビツカヤやナグロツカヤが描く「新しい女性」像と共鳴しつつ、結果として〈性〉の規範を破る作品として、その一角を担うこととなったといえよう。

\*

第2章から第4章までの考察から、女性向け大衆小説にあらわれる「新しい女性」としての「男性的な女性」という性別越境的要素を有したジェンダー表象の存在が明らかとなる。そうした社会において規定された「女らしさ」を遠ざけ、「男性化」しようとする女性たちは、女性嫌悪を内包した男性並みの平等を志向する主人公たちである。この「男性的な女性」というジェンダーの越境に表される性規範からの逃避の行きつく先は、ナグロツカヤの『ディオニュソスの怒り』の場合は家族関係のねじれ、ヴェルビツカヤの『幸福の鍵』の場合は主人公の自殺、チャールスカヤの少女小説の場合は血縁によらない拡大家族的な親密性の形成であった。これらはいずれも、異性愛主義的な生殖＝再生産を相対化させる結末である。

ここで想起すべきは、近代を駆動する「[ヘテロ]セクシズム」の体制が、女性にたいして生殖による種の再生産を性役割として課すいっぽうで、再生産をおこなわず、男性同士のホモソーシャルな絆を乱しかねないホモセクシュアリティもまた排除の対象とすることである。そこで第5章では、この男性同性愛の問題に焦点を当て、当時のロシアに存在した男性同性愛という周縁化されたセクシュアリティについて分析する。

## 第5章 男性同性愛をめぐる言説の構成と変容

### ——ミハイル・クズミン『翼』から女性向け大衆小説へ

第5章では、男性同性愛がいかにか小説のなかで描かれているのかを考察する。そのさいには、作品内で描かれる同性愛にいかなる視線が向けられ解釈されていたのかという、メタ的視点のもと考察をすすめる。そこではじめに、20世紀初頭のロシアにおける交錯した同性愛の言説を整理する。当時のロシアでは、西欧からの性科学と、「新しい人間」の構想をめぐるロシアの反実証主義的な宗教思想を基盤とした性愛論という、ふたつの異なる言説が存在していた。男性同性愛は、いっぽうでは性科学の流入によって「病」と結びつけられ、同性愛が行為から人格へとその概念が変容した。他方、ローザノフに代表される性愛思想において、男性同性愛は生殖＝再生産によらない人類の発展のために、あらたな性愛のあり方を模索する「新しい人間」の構想の一環として位置づけられ、特権的な地位に置かれた。

以上の男性同性愛をめぐるふたつの言説の存在を前提として、ミハイル・クズミンの小説『翼』(1906)と、直接的にクズミンとの影響関係があるとされるナグロツカヤの作品『ディオニュソスの怒り』、『ブロンズの扉のそばで』(1914)(および、ドイツ語版の

『ブロンズの扉：錯綜した熱情にあふれたある愛の物語』（1913）を読解する。『翼』はこれまでホモセクシュアルの主人公の少年の「カミングアウト小説」とみなされてきたが、作中では、性科学にもとづく確固とした同性愛者としてのアイデンティティが構成されておらず、それゆえ、これまでの解釈に留保をつける必要があるだろう。むしろ、この小説に描かれる同性愛とは、男性同士の友愛と性愛が混濁したものであり、ローザノフの『月光の人々』（1911）のような性愛思想の世界観に近いものである。これにたいして、クズミンから影響をうけたナグロツカヤの作品では、性科学の概念に立脚した男性同性愛者が描き出されており、当時の流行思想であった性科学を用いて周縁的セクシュアリティが描出されている点において、クズミンとは対照的であることが明らかとなる。

#### 終章 非規範的な〈性〉をめぐる境界の編成

終章では、これまでの議論を踏まえ、女性向け大衆小説にあらわれた非規範的な〈性〉の表象を描く際に用いられた原理を「平等」の追求と「差異」の強調として、理論的水準において捉え直す。すなわち、女性向け大衆小説には、性差の最小化という「平等」の追求と、差異の最大化を志向する「差異」の強調という、〈性〉の境界をめぐるふたつの方向性の違いが存在していることを示す。このジェンダーの境界をめぐるスタンスの違いは、一見矛盾するかのようにみえるが、しかし、いずれも男女の差異を前提とする同一の近代の性秩序から生じた戦略の違いなのであり、原理的には「平等」の追求と「差異」の強調は表裏一体の関係にある。したがって、女性解放を志向する女性向け大衆小説においても、差異の強調は言うまでもなく、男並みの平等を志向することによってもまた、逆説的に、人間を峻別するうえでもっとも根源的とみなされる性別という差異が露呈し、強化されてしまうことになるのだ。それゆえ女性向け大衆小説は、一見すると性の境界そのものを解体・攪乱しているように見えるが、平等／差異のどちらの道を選択しても、じつは「男／女」や「異性愛／同性愛」といった二元論的カテゴリーを強化してしまっているのである。

もっとも、こうした二元論の強化は作家の力量不足や時代の制約のみならず、作家が大衆小説という特性上、読者への「わかりやすさ」を優先させた結果であるといえよう。男か女か、異性愛か同性愛か、といった二者択一的図式は本論において幾度となく反復されるが、これらの二項対立は読者の理解を得やすいメロドラマの基本的特徴であり、

大衆女性作家たちはメロドラマの「文法」に忠実であるのだ。

だが女性向け大衆小説は規範を再生産するいっぽうで、そうした規範や支配的言語や言説を用いつつ、「[ヘテロ] セクシズム」にもとづく社会通念の偏向を露わにし、境界を再考する契機を孕んでいる。女性向け大衆小説の作家たちは、二項対立的な図式にもとづく「わかりやすい」言説を選び取り、規範の強化というリスクを冒しながらも、既存のジェンダー秩序に挑戦し、読者の関心を喚起したのではないだろうか。女性向け大衆小説にあらわれる非規範的〈性〉とは、異様なまでに性について語り、男女を二つに分類し、「異常」とされる性を放擲する近代的セクシュアリティ観によって生み出されたものであるのも確かだ。しかし同時に、そうした作品にあらわれる多様な〈性〉を含んだ描写は規範的なものから排除されてきたものでもあり、それらは、ジェンダー秩序を内破する力を持ったのである。